

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	H・A	指導教員 (主査)	小野寺敦子教授

論文題目	療育者の共感満足・共感疲労がバーンアウト傾向に及ぼす影響
------	------------------------------

本文概要

【問題・目的】大久保・大谷(2013)は、福祉領域の利用者との対人関係では、バーンアウトが問題となると指摘する。療育者のバーンアウト研究は少ないが、小林他(2006)では保育士のバーンアウト状態が「注意すべき」状態の人は「情緒的消耗感」「個人的達成感低下」「脱人格化」の各因子において1割以上で、少なくとも1つが「注意すべき」状態の人は35%であった。そして保育士のバーンアウト研究には感情労働という視点が欠如している(佐藤, 2014)。佐藤(2014)は、プラスのストロークが、バーンアウトを軽減する一因となる可能性を示し、感情労働を共感疲労・共感満足という視点から見ると負の側面ばかりではないとする。これまで療育者を対象にした研究は少なく、共感性の視点から感情労働を捉えたと援助をする相手に共感性を持ちながら関わることで援助者自身にも肯定的な影響が現れる可能性が考えられる。本研究では療育者を対象に、共感満足・共感疲労がバーンアウト傾向に及ぼす影響を検討することを目的とする。

【方法】対象者：児童発達支援に従事する男女126名。調査時期：2023年8月～9月。方法：Webによる質問紙調査。使用尺度①保育者効力感(三木・桜井, 1998)4件法, 14項目。②バーンアウト(久保・田尾, 1992)4件法, 14項目。③共感満足(藤岡, 2007)「共感満足」因子のうち「あなたについての項目」のみ使用4件法, 14項目。④共感疲労(松田他, 2018)4件法, 12項目。⑤療育のやりがい4件法, 26項目。⑥職務満足感(安達, 1998)4件法, 20項目。⑦フェイス項目(経験年数, 保有資格等)。

【結果・考察】共感満足低群・中群・高群を独立変数, 「情緒的消耗感」「個人的達成感の後退」「仕事拒否感」を従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果, 群間得点は「情緒的消耗感」で0.1%水準($F(2, 123)=23.43, p<.001$)で有意, 「個人的達成感の後退」で0.1%水準($F(2, 123)=10.88, p<.001$)で有意, 「仕事拒否感」で0.1%水準($F(2, 123)=16.12, p<.001$)で有意であった。さらに, LSD法による多重比較を行った結果, 「情緒的消耗感」で低群($M=2.91, SD=.09$)が中群($M=2.52, SD=.07$)よりも1%水準で有意に高く, 低群が高群($M=2.14, SD=.08$)よりも0.1%水準で有意に得点が高かった。「個人的達成感の後退」では, 低群($M=2.45, SD=.37$)が高群($M=2.16, SD=.27$)よりも0.1%水準で有意に高かった。「仕事拒否感」では, 低群($M=2.11, SD=.60$)が中群($M=1.65, SD=.46$), 高群($M=1.46, SD=.58$)よりも0.1%水準で得点がありに高かった。感情労働に従事し, 共感疲労が高い人は, 自らが療育をする上においての悩みや不安を溜め込みやすく, そこからバーンアウトになる可能性が考えられる。久保(1999)では, 対人援助職者は仕事の性質上, 悩みや弱みをもつことが仕事に対する適性のなさを表すものとして, それを上司や同僚に開示することに心理的抵抗を感じやすいと指摘している。療育者は仕事を上において障害を持つ子どもと関わるが, その中で感じる子どもに対しての否定的な感情(その子どもの姿を理解したいがうまく受け入れられない, 子どもが分かりやすいように接したいがそれ自体に疲れてしまう, 子どもに対してネガティブな感情を持ってしまふなど)は周りの人に相談しにくいことが考えられる。対人援助職は, 障害を持つ子ども以外にも, 様々な人に対して受容をすることが求められるが, 利用者と援助者の両方の「枠組み」は大事である(藤岡, 2006)というように, 支援者自体も受容されるようなサポート体制が, バーンアウトを緩衝するためには必要となるであろう。